

：人間性は次のように出来ている。それは（人間性）至上の必要性、事物の力、不幸や苦勞が鋭くなくて、初めて前進するのだ。理念は理論的なもの、宗教性のも、形而上的なもの、或は科学的なものにしろ、兎角、諸個人（複数）しか捕えない。大衆はそうした理念と自分達の個々の本能が逢うか、巻込まれない限り、また彼等の経済状況を刻印する重大な運動を伴わないと無関心であるか反撥するのだ。だがその出逢いがあれば大衆は眼覚める。そして理念が彼等の胸に落ちると彼等の自発的な熱望と融合して、それ（理念）は不敗のものとなり、何等かの遺り方ですべての障害を排する道を作り、理念が勝利する。

これこそわれわれが擁護する運動の勝利について消し難い信頼を寄せる理由だ。

しかし言って置かねばならないのは、社会主義者の理念が未だに不完全にしか波及せず、受け入れられないのが米国である。あそこでは酷い敵意に遭遇している。それはブルジョワ思想、ブルジョワ意識、ブルジョワジーの政治的経済的慣習によるのだ。米国では誰でも、そんなに古い頃からではないが、ブルジョワであり、米国の労働者でさえ多かれ少なかれその氣風に染っている。

私がブルジョワ意識と名付けるものは現代史の四つの原因で作られている。

1. 原因の第一は、宗教改革であり、現実的であるよりは虚構の、地上のものではなく天上の連帯性、カトリック世界の破壊によって、言うならば意識を個別化し、各人を孤立の状態に置き、これを至上の虚構に連結して（そのため）すべての人間の連帯を崩壊させ、地上のエゴイズムを天上の推進者としたのだ。即ち絶対的自己を神に連結したのである。
2. 第二の原因は形而上的の神性だ。これは多かれ少なかれ理性的仕方では体系化され、また多かれ少なかれこの喜ばしきプロテスタント風の理念でもって、すべての人間の孤立化した自己を必然的な虚構

の關係に還元して、先づ絶対的自己を伴う不死なる者を想定した。次いで物質的自然や人間の社会性からではなく、その自然な運命的連帯からではなく、私の言ったあの絶対的虚構的理念性からで、人間の連帯の否定から初め、永遠の分割者であるあの神を手段として、それは（形而上的の神性の事―註）最初に彼等自身の間に人間關係を作り、次いで、非―自己の物質界と關係を作ったのである。更に進んで理想主義者のあらゆる教義の定型方法に関して言えば、抽象的原则から自然で現実的な事象に及ぶから、当然後者（自然で現実的なもの）をよく理解せず不自然にするのである。哲学ではそれは神と創造主、事物の第一原理とし、創造に就ての不条理論になる。政治ではそれに社会契約のように虚構であると同時に不条理な任意の結論を作る。それによれば初めの人びとに依るより良きコミューンが見られるがその人びとだけが初めに完全な自由でお互い合い合うだけである。さて社会的経済に於ては、形而上的の神性は、ブルジョワのすべての宗教や実践哲学を要約する次の格言に完全な表現が認められる。即ち各人は自分の為、そして神はすべての人のために、と云うのだ。

3. 第三の原因はブルジョワ政治革命で、これは17世紀に初まり、宗教改革に刺激されて、ヨーロッパの諸社会を容れはじめた。最初フランスに起きたが、それも低地諸国、そして少し後になって英国、そこから北米に移植された。言うならば北米こそその本当の所産である。更に一世紀後になると百科全書派のユマニストの宣伝に光明を得て、宗教的であるのをやめ哲学的、特に形而上学的になった。先づ北米合衆国の興隆によって、決定的勝利を納め、次にフランスの恐るべき災厄になった。

この革命は人がよく見て来たように、全く否定的であった。しかしさようなもの（否定的なもの）として、人間性に巨大な貢献をしたのだ。それは原則を殺害した。更に事実には、数世紀の悪夢、權威の原則を殺したのだ。それは神を玉座から引きつり降ろし、等しくそれ以後、人間の力に不可能はないとした。それ以後、人が何をするにしても、時間に長短があるにせよ、今日でさえ何処でもやっているように、虚構の立憲政治やいわゆる民衆の代表という仮面によって、軍事的独裁や專制的中央集権、財政と警察の集権化を設定することはできよう。しかし大衆の迷信的尊敬によって支えられ

正統權力を創設するのは最早できないのだ。敬神の悪徳は人間の頭蓋の中から消えた。反逆の本能——悪魔、終末観が反キリストと予告したものを未来に來るべき者で、法皇が申し立て確認した後、数日を経ずして、それが人間社会から生まれ得るのだ。そして天上や地上のどんな手段をもってしても、善良なビエ九世（法皇）の敬虔な悪魔払いをもってしても、それとは関係なく、われわれと同盟し、その敵手マツツィーニの怒り狂った破門でも、政府筋の現実的で真剣な手続きによっても、最早それ（反逆のこと）を遠ざける力はないのである。

權威の原則が民衆の中で無になったからには、誰がそこに何を設定しようとも、それは一時的で不安定なものとなる。上から吹き込まれた秩序は、以後不可能になる。そして人間社会は以前のようには有機的で平和で安定したものに再建される事はないだろう。教会と国家の外側で、あらゆる宗教的、形而上学的、政治的、司法的虚構の外側で、救済と社会的平等を基礎にして、現実的配慮と科学及び自由の三極活動に依らない限り、社会は再建されないのだ。

この事実は、多かれ少なかれ特権的存在の無罪な歡樂を平和に楽しもうとするブルジョワにとって是不安定しか約束しないが、人間性の確実な勝利を望む人びとには大きな慰めとなる。というのはそれこそわれわれが作りだした事実であり——決して忘れることなく想い起こさねばならないのだ——われわれが知的、苦勞な仕事を独自に請け負い、過去のブルジョワの収奪に耐え、先づ最初は宗教改革の闘争に、その後は信仰に対するメタフィジックな思想の反逆を当て、そして最後に政治革命を担って来たのだ。むろんその初めは、プロテスタント諸国がイニシャチーブを執っていた。しかしその最終結果まで押し進めたのはいわゆるカトリック教国のフランスだった。それ以前の政治的諸革命は妥協でしかなかった。フランス大革命こそ大胆に難問を解決したのであって、過去と現在に深淵を開いたのである。

一七八九年以来、教論国の著名人、M・ギゾーが良く觀察したように、フランスで発起された革命はその破壊の仕事を決してやめなかったのである。革命がわれわれを生かせ、革命がわれわれを生き

残らせたのだ。それ（フランス大革命）は世界中を駆けめぐり、地下の炭坑夫のように働き、ヨーロッパ諸国の民衆の胸に満ちた難い様子で定着し、人が思いも設けぬ時に異なる地点で同時に破裂し、数世紀に亘って確保してきた国家組織を至る所で破壊するのだ。もし英国の立憲制がすべての中で最も尊敬に値し、英国民衆の慣習と歴史的伝統に深く根づいていいると思われる——動揺するとすれば、それは次のように見られよう。即ち人が今日憲政に保証しているもののお蔭は十年の寿命しかなく、これ迄熱烈な（憲政の）擁護者であった英国の特権階級は自己の權益がことごとく脅かされ、遂には自己の存在までが危くなり、それに応じてプロレタリアートの上昇運動があり、それは（特権階級に対し）議會制度の有益な遊びと言う極く平凡な信仰しか確保しないから、遂には彼等の心情にクーデターや軍部独裁の考えを生むだろうという事である。

それこそあのフランス大革命が人類に貢献した抗い難い巨大な奉仕であり、われわれはすべてその子供である。しかし私がここで繰返し言うのは、これ迄の所それは否定的な奉仕でしかなかったことだ。確かにそれ（大革命）はすべての政府形態を不可能にした。けれど政府形態なしで生きられるような仕方では社会を組織することはできなかった。そうできなかったのは、これまでの所、それが全くの政治革命であって、経済的社会的革命でなかったからだ。或はもっと厳密に言うなら、あれは経済的革命でもあったろう。しかしそれはブルジョワジーの排他的利益のみを確保し、プロレタリアートに損害をかけたのだった。一八四八年六月迄と一八七一年三月迄、それは主としてブルジョワ革命だった。だから革命はやったが歴史のあらゆる革命がそうであったように、民衆の腕で救われていながら、中産階級によって働かれ生みだされ、排他的にこの階級の利益のためであった。封建的経済の廢墟の上にブルジョワジー経済が勝利したのだ。

4. 第四のそして最後の原因、われわれが今日、ブルジョワジーの意識と呼んでいるものを創った原因は、このブルジョワジーの経済的解放であり、ブルジョワ経済方式の創設によるのだ。この原因は歴史的現実化と以前は判らなかつたものの完全な顕在化によって、最終的なものとして明瞭になった。

ブルジョワ経済は現世紀を出発点にしたに過ぎないが、封建制のあらゆる拘束と隷属を解放し、政治的社会的効果において自由に展開している。しかもこの最終のものが顕現したのは、解放運動でありブルジョワ経済の継続的勝利であり、それが本当の推進者や生産力になっている。しかも初めにはすべての宗教的、形而上学的、人類的、政治、法制等、それに社会的な諸運動の眼にみえない推進者であり、やがて明瞭になるにしてもそれらの先行者なのである。

（原註はバクーニンがマルクスの下部構造としての経済組織の变革を追認し、マッツイーニの新神学説を批判したものが付されている。）

民衆について

民衆はいづれの民衆でも、古風であったことはなく、そうなるものではない。民衆は自然そのもので、年を経るに従って、賢明で進歩的で歴史的になるが、年代的発展にもかかわらず常に自然のままである。即ち宗教的、形而上学的、政治と立法の抽象や虚構に對し、人がそれでもって奉仕せよとする限り、永遠に抵抗するのだ。民衆は教会と国家の自然な敵で、特に無意識な対手である。

民衆はよりよい生存につき絶えずまた深く實際的に熱望する故に自然に宗教的になる。これ以上に正当で自然なものがあるだろうか？ その心は広いけど狭ばめて生きている。民衆は飢え、奴隷となり、不幸がその運命だから、人間的で自由な生存を熱望する。民衆が宗教的であるのは、広大な實際的連帯の意味によってそうなるのだ。この基本、人間社会のこの基本法則を民衆は深く知覚しているが、一般に人は感じ取れず知らないし、特権階級の人は誰もそれを認識できないのだ。民衆は正義と平等の本能を持っている。それこそ現実的な宗教だ。そしてそれが本能的・社会的主義（Socialisme instinctive）に他ならない。

しばしばまた特に人がいつも言うのは、その自然宗教と民衆の實踐は、多くの愚かさや悪い迷信の

組合わさったもので、その大部分が民衆の無知から生まれ、また特権階級は常に上手に利益があるように啓発されて居ることだ。しかも民衆は八有徳の才たけた人びとや教師により体系的に教育されるのである。けれど民衆は決して人が神学者と呼ぶものになることはないし、教義を創設するとか発明したり、理解することはない。また決して教会の公的組織の擁護者になることもない。というのは原始的魔術や呪術から始まった公的な秘儀や司祭者達はマッツイーニ流の宗教を公認して組織化するだけでなく、自己の損害を背負いさえするのだ。

民衆はまた自然な愛国者だ。自分の生まれた土地を愛し、自己が成長した環境での風土を好む、この愛は一般に人間的愛と同じで、基本的には生理的動物的感情に基礎をもっている。それは美德でもなければ義務とか教義ではなく、自然な事実で、先づ極く限られた事実であり、共同体の範囲を越えないものだ。現実的で生きいきした愛国主義、民衆の自然な力は本来決して国家的な愛国主義、地域的なものでさえなく、その最大なものでも共同体的なものである。しかし民衆は自分の話す言葉、特に他の言葉を知らなければ自分の言葉だけで考えること、感じることをすべてを語り、こうして社会的、人間的に生きるのだ。民衆は自分の善いにしてる悪いにしてる慣習や理念に同化する。そこでもしその慣習、理念、言葉がある地方を包括すると、そこで始めて地方的な愛郷者になる。もしそれらが一国を包括すると国民的な愛国者になるのだ。

その意味で民衆程深刻で真剣な愛国者は他にないのである。だがもう一度この愛国主義、一国を包括するものとしてみるならば、それは決して美德、義務、教義ではなく、人がそこにあるものとして承認し、確認し、尊敬しなければならなくなる。つまり人間の自由の自然な形式を尊敬しなければならぬように：である。これを人道的視点からみれば、それこそわれわれにとって相対的視方であり人間一般を考慮する事だが、われわれはそれに（愛国主義に）絶対的性質を付すことができ、その事象は現実生活で崩壊している集団意識、あらゆる組織／祖国におけるそうした意識に對し、より有効で好ましく人間的になるので、それが相対的により人間らしいものとなる。そこで愛国主義の中に現

実的に良いもの、人間的に正当なものがあるとすれば、それは普遍的で人間らしいこと、即ち原理や教義に変質した愛国主義を否定すること、排他的に国民的なものに閉じこめるのを否定することである。

それは決して民衆の本能ではなく、政治的抽象（思想、原理）である。国家が愛国主義を原理として設定し、宗教的秘儀の対象にするのだ。民衆の愛国主義は自然な集団の自由の発展に同化し、当然強力で密度が高く、共同体内部ではより現実的でまた何よりも粗野である。次いで集団的生活の発展によって常に人間化され、それは日常の配慮や本能や思想によってそうなるのだが、この下から上への自発的で進歩的な歩みを強力にさまたげるものは何もないのである。だが拡大するにつれて自然の本能や粗野さは弱まり、まず地域におけるコミューンの自由連合により、更に地域が集合化して人の呼ぶ国の規模になると、遅かれ早かれ、この自由連合の道筋によって組織や人間の連帯意識の中に解消してしまうのだ。

そうしたものが自然の発展であり、もし新しい要素や自然的に平等な社会形態は—むろん自然には異質で敵意をもつもの—が侵入してこの平和な成行きをさまたげない限りそうなるというのである。私が言いたいのは民衆や異種族の闘争であって、これは自然界における種々の動物の絶えざる闘争の継続に他ならないのであって、生・死・闘争が動物界を血なまぐさい悲劇の場に行っているのである。それが戦争であり、征服であり、平和に労働する民衆を、一群の野蠻人共が軍事的に組織され訓練を受け、幸運と儲けの野盗の観点から収奪するのである。さような征服者がいつでも国家の創始者であり、また教会の創始者であった。

：プロレタリアートの心根は立派なものである。善意と人間的心情で一杯だ。自然に自由と平等と正義を愛し、自己信頼と自己の権利—当然後者（自己の権利）は皆の権利になるのだが—を強く信じている。民衆の心には未来がある。であるからして、君がそれを占領したり、君のブルジョワ原理でそ

れをねじ曲げたり狭少にしてはいけない。そこで君がもし本当にプロレタリアートの為になりたいとする善い心懸けにつき動かされているのなら、もし君がプロレタリアートは過去と現在の自己の監督者から面と向って解放されるべきだと希望するのなら、教示をもたらすことだ。それは科学である。強者と金持の神、エホバが呪った樹の果実（科学）は反逆と民衆の力の組織を生むのだ。プロレタリアートに君の啓蒙された道徳を与えてはいけない、それは虚偽だから……だが精神の光（啓蒙）を与えるべきだ。プロレタリアートは未だそれが必要なんだ。

（反マツイーニ論）

：共和派であろうと民主派であろうと、彼等には民衆が羊の群に見えるのだ。むろん幸福にして差上げようが、それは彼等の遣り方である。彼等は民衆が自分の胸に一個の思想をもち、原理をもち、それが彼等の原理と違うのを疑ってもみない。民衆の原理は社会的状況、人生の、貧窮の、苦勞の、表現であり、歴史的経験と現実の熱望が民衆の本能程に反映しているのだ。ところで今日、諸国のプロレタリアートをつき動かしている主要な感情と思想の一つは、疲勞であり、いや氣、不信、あらゆる権威への憎悪である。ところが彼等（マツイーニの徒、共和派、民主派、要するに指導者達）ときたら今日でもこの大衆に強制できると空想するのだ。大衆は絶対的に空なる容器か白紙のようなもので、何だって書き込め、彼等の教義やら原理やら頭脳を痛めた勞作—神秘的で政治的でブルジョワの所産—を注ぎこめると思っている。何んという彼等の幻想だろうか！

（プロレタリアイタリアノ誌への手紙）

政治否定

：その意味はこうだ。1市民カール・マルクスが編集した（共産党）宣言で要請したような政治権

力の奪取の中ではなく、権力をそのあらゆる形式と表現において廃絶することである。そこで私が言いたいのは、諸君も党のドイツの労働者民主社会党のプログラム中のあの項目は支持していたが、それには政治的解放は前提条件であるところが新版によれば、やむを得ない付随物、経済解放のVと宣言している。そうだわれわれだって常に理解し反対しているのは、宗教的、メタフィジックな、政治的、法律的諸制度が組合わさってブルジョワ文明になり、それが経済的不平等の唯一の基盤になり、しかもその（文明の）保護と永続的な存在をつづけるのだから、その限りプロレタリアーが人間的権利を獲得し、自由、平等、正義を実現しようとする努力は無駄になるだろうということである。あの人びとは夢想したり討論したり希望はできても実現はできないだろう、もし実現したければ、一つだけでなくあらゆる活動をさまたげる除魔物をことごとく、先づ地上から掃除すべきである。つまり除魔物を除く力をもつために組織化することだ。

ところで一つの力を組織化したければ、まずその目的を立てなければならぬ。というのは目的の性質がその組織の形式や本質そのものを基本的に左右するからだ。そしてそれこそわれわれがドイツ民主社会党員と別れるところだ。愛国的社会主義者や政治家達は先づなによりもドイツ民衆の手によって、強力な新国家、ゲルマンの、共和制の、また言えば人民国家を樹立しようと希求している。翻ってわれわれからみれば、それはドイツ民衆に新しい老獄を作るようなもので、近隣の民衆の自由にとって脅迫的な砦を作ろうとすることだ。それにわれわれはさような牢獄や砦は廃止し、すべての政党を解体して、国家のくびきから解放された民衆の友愛団や連合に解消しようと希求するのだ。彼等の政治肯定に対し、われわれは政治否定で対抗しよう。それこそ国家の解体である。

（ジュラ同盟の同志達に）

（ドイツ社会民主労働党のプログラム第4項は政治的自由は労働者階級の経済的解放の前提条件である。従って社会的問題は、政治的問題と不可分、前者の解決は民主的國家に於てしか可能では

ない。V

バクーニンが（新版）と解したものは一八七一年一月九日ブラクセルでリベルテール誌に載った訳文を誤解したものとアーサー・レーニングは註記しているが（Bakounine, oeuvres complètes vol. 3 p. 390 Note No. 65）ポールロビンが言ったようにインターナショナル内部に二意見があって、その一つは労働者が政治権力を求め獲得すること、悪くても現実の議會で獲得すべきだ、これに対しさような手段を嫌い、現実のブルジョワ國家の外でプロレタリアートの政治組織を求める人々がいた。Vそうだから、バクーニンは争点の一つに対し立場を明瞭にしていることになる。なお資料1、第1インターナショナルナルトバクーニンを参照されたい。

ブルードンについて

…（マルクス）がブルードンについて行った容赦のない批評は、そこに多くの真実があるのは疑えない。…出発点は法の抽象的観念である。即ち法から経済事象へ進むのだが、マルクス氏はブルードンと違つて、疑い得ない真実、過去の歴史と人間社會の現状、民衆と諸國家に徴して確認させたものを表明し証明した。つまり経済的要因が常に先行し、法的、政治的法則に先きだつということだ。…

…マルクスは極く真面目で深刻な経済学思想家である。彼は現実に唯物論者であることで、ブルードンに対し大きな利点をもっている。ブルードンは古典的理想主義の伝統を救出するのあらゆる努力をしたにもかかわらず、生涯の大部分を匡正しがたい理想主義者で通した。私は彼の死の二ヶ月前に彼にそのことを語り、聖書とかローマ法とかを語るけど、爪先までいつだって形而上学者だと話したものだ。彼の最大の不幸は、自然科学を学んだことがなく、その方法になじみがなかったことである。ブルードンは正しい道程を予見する天才の本能を持っていたが、その精神が理想主義者の習慣、悪癖に引き込まれ、いつも古くさい錯誤に落ちこむのだった。それでブルードンは絶えず矛盾し

活力のある天才、革命的思想家でありながら、常に理想主義の幻影と闘い、またそれらを屈服させることはできなかった。

マルクスは良い道程に在る。彼は歴史の内ですべての政治的、宗教的、立法的進化は、それらが原因になるのではなく、経済的進化の結果だとして、原理を設定した。むろんこれは彼だけが創出した偉大で豊かな思想というのではなく、他の人びとによっても予見され、部分的には表明されていたのだ。しかしそれを確固として設定し、自己の経済体系の基礎にした名譽は彼のものである。他方ブルードンは彼よりはるかに多く自由を理解し感得していた。ブルードンは教義や形而上学は作らなかつたし、革命家の本当の本能をもっていた。彼は悪魔を敬愛し、アナキーを宣言した。マルクスはブルードンより自由を体系において理論化したり理性的にするのはできるだろうしかしブルードンの本能はないのだ。マルクスは頭からつま先まで權威的コミンニストだ。

(バクーニン、"自由"抄録版)

マルクスに就いて

：古いお話だ。権力が人間を墮落させる。同じように最も知性の高い人、献身者も人間を墮落させる……マルクスは知性の高い人、語義に含まれたそのまじめな範圍での最高の学者だ。深遠な経済学者である。マツィーニを比べると皮相的な経済知識しかないのだから彼(マツィーニ)はようやく学生と呼べるくらいだ。その上マルクスはプロレタリアートの大義のため熱心に尽している。それは誰も疑えない。というのは30年熱烈に忠誠をもってそれに尽してきたのは否定できないのだ。……よく理解しよう。人間の深く真面目な熱烈な愛は、常に憎悪と表裏になっている。人は不正を憎まないで正義を愛することはなく、權威を嫌はないで自由はなく、あらゆる専制的な知性や道德の源泉――天上の専制君主である神の不道德な擬制を憎まないで人間性はあり得ないのである。圧制者を憎まない

で被抑圧者を愛すること、ブルジョワジーを憎悪しないで、結局プロレタリアートを愛するなどは出来ないことだ。マルクスはプロレタリアートを愛する、故にブルジョワを憎悪する。人は愛なくして運動のために引きつづき30年間、熱烈に働くだろうか。プロレタリアートの運動に対するマルクスの愛を敢て否定するために、悪罵で成り立つ悪い党派をもたねばならないのだろうか？ マルクスの欠点は次のようなものだ。

1. まず学問を職業とするすべての学者がそうであるように、彼は教条的だ。絶対に自己の理論を信じ、自己の理論の高みからすべてを演えきする。学問があり知性のある彼は、必然的に自分の仲間(parti)があつて、友人から成る一箇の内核は盲目的に奉仕し、彼の言葉によってしか判断せず、彼の思想によってしか考えず、彼の意志によってしか意志をもたない。別言するとあの人は彼を神格化し、崇拜し、その崇拜によって彼を墮落させ、自分達も墮落するのだ。彼は自分が社会主義、または共產主義の法皇だと極く真面目に思うようになったのだらう。何故なら彼の理論によって、それは權威的コミンニストのものが、マツィーニと同じように、他の理念や多くの方法――マツィーニのものよりずっと現実的で地上的なものにより、また国家の強力な集中権力でプロレタリアートを解放しようと考えているのだ。

2. マルクスには自己の絶対的理論についての自己崇拜と絶対主義者が同居している。その結果ブルジョワジーを嫌うだけでなく、彼に抗うとか彼の理論と異なる理念の秩序に従う人のすべて、革命的社会主義者をも嫌うのだ。マルクスはあれ程の知性と等しく真面目な献身者でありながら、奇妙なことに学者として、ドイツの著述家として受けた教育のため――特にユダヤ的神経質としてしか説明のしようのないものがある。マルクスは虚栄が強く、その虚栄も不潔で暗愚なまでに達している。だから誰かがこの病的虚栄の、いつも感じやすく、いらいらしている世間知らずの彼を傷つけるような不幸な羽目になったら、その人は和解できない敵になるのだ。そして彼はあらゆる手段が許されると思ひこみ、世間の評価の中で相手を破滅させるよう最も恥ずべき不正な手段を現実に用いるのだ。その人

に対し嘘をつき、創作し、酷い悪罵を払める…。

マツツイーニとマルクスは、他の関係では差異があり、その差異はいつもマルクスの不利な点ではないにしても、この兩人は同じ情念で動かされている。それこそ政治的野心である。マツツイーニは宗教的で、マルクスは科学的教条的だ。けれど等しく彼等の理念によって、大衆を支配し、教育し、組織化しようとの考えをもっている。……

：悪は権力を求め、支配機構を愛すること、権力の渴望にある。しかもマルクスはこの悪に深く染まっているのだ。

3. 彼の理論には多くのものが用意されている。彼は主唱者であり吹鼓者であり、ドイツ共産党の主要な組織者である。だが全般的にみれば、彼は組織者であることは少い。組織化の能力より策謀によって分断する才能がある。彼は権威的コミンニストであり、国家によってプロレタリアートを解放し組織化する闘士である。そしてそれを上から下へ、知性によって、啓蒙した少数者の保持する科学によって行うのだから、当然、社会主義者達の意見表明により愚かな大衆の福祉にそれを及ぼさうというのだから、大衆に対し正当な権威を振うことになるのだ…。

：マツツイーニは自己の理念と使徒達によって、マルクスは自己の理念と自分で、それぞれの国を一日支配するだけでは満足せず、普遍的な権力、普遍的な国家を夢想している。マツツイーニはイタリヤを手段として用い、まず自己の理念に沿って組織し、次いで世界の覇権をもとうとする。マルクスはドイツを手段として用い、彼にとつてはドイツ民族が世界を再生させるのだ。マツツイーニはイタリア主義者であり、マルクスは骨の髄まで汎ゲルマン主義者だ。

：マルクスの親密なサークルには多くの裏の下心と外交辞令がある。そこにはそれぞれの自愛(ambitions proper)から出た陰險な闘争と奇妙な妥協がある。あのサークルでは見栄が獲物で、友愛の居場所がない。各目は自分で身を守らなければならない。というのは自分に犠牲や消される順番の廻ってくる強れがあるからだ。マルクスのサークルは見栄の相互契約で動いている。名譽の授与者は主として

マルクスだが、不誠実で陰險な煽動家であり、決して率直で大らかな所がなく、彼に陰影をもたらす人を迫害し、すべての尊敬を与えない人ひとに不幸を授ける。

：私は経験によって幾つか知っている。マルクスと私は古い知己だ。一八四四年パリで初めて彼に逢った。私は既に亡命者だった。私達はかなり親しくなった。彼は当時私より数段進んでいた。今日でも私よりずっと比較にならないくらい進んでいる。私はその頃政経学は知らなかった。その上メタフィジックの抽象化に欠点があり、私の社会主義など本能にしか過ぎなかった。所が彼ときたら私より若かったが(マルクスは4才若い！訳註)既に無神論者で唯物論学者、それに自覚的社会主義者だった。彼が現在の体系の基礎を固めつつあったのも実にその当時だった。私達はよく逢った。というのは私は彼のプロレタリアート運動のための科学と情熱的で真面目な献身！それには個人的見栄が混じっているにしても！に對し、彼を尊敬したのだ。私は彼との会話をいつも渴望して求め、それはいつも教示的精神的なもので決して野卑なもの含まなかった。お互いあのような親密な率直さはないだろう。私達の氣質が合わないのだ。彼は私をセンチメンタルな理想主義者だと言う。それは有理だ。私は彼を不誠実で陰險な見栄坊と呼ぶ、私も有理だ。

一八四八年私達は意見に相違があった。言えば彼の方が多くの点で正しかった。彼はパリからブラッセルまでドイツ共産主義者のセクションを創設し、フランスや英国の共産主義者の参加を得て、また別れることのない友人エンゲルスその他に支持されて最初の各国共産主義者の国際協会をロンドンに作った。この協会の名によって、エンゲルスと協力して、あの素晴らしい共産党宣言という名称で知られる文書が生まれたのだ。

私はと言えば、ヨーロッパの革命運動に夢中で、その革命の肯定的な面より否定的な面に首をつっ込み、言うならば来たるべきものを実体化したり組織化するより、現にあるものを覆滅するよう働いていた。

特に私が彼に反対した点がある。スラブ人として私は、革命によってドイツ人のくびきからスラブ

人を解放したいと思った。即ちロシア、オーストリア、プロシア、トルコの諸帝国を、民衆の再編にとって、下から上へ、彼等個々の自由によって、また経済的社会的完全な平等に基き、革命家が何と言おうとまだどれ程実効があるにせよ、決して權威の力によらず、破壊するということだった。私の側で反省してみると、そこに当然今日私達が別れるに至った体系の差異がある。私の理念と熱望がマルクスの氣に入らなかったのだ。先づそれが彼のものでないと言うこと、次にそれらが權威的コミンニストとしての彼の確信に反したこと。更に今でも彼が認めているように、ドイツのくびきから解放しようとするスラブ人の權利を認めなかったこと。彼はドイツ人がスラブ人を文明化するという考えなのだ。即ち氣まぐれに力によってゲルマン化することなのだ。

異なる理念の実現を大胆に追究し、それが彼のものに反するので私を罰するため、マルクスは彼のやり方で復讐した。彼はコロン(ケルン)で発行しているライン新聞の編集者だった。そのある号でパリ通信を読んだが、ジョージ・サンド夫人(彼女とは一時期面識があった)の語ったのによれば、誰でもバクーニンを警戒しなければならぬ。というのは、彼はロシアの手先とか何かそうしたものだ。『Il fut quelque chose comme un agent russe』から。この批難は丁度革命組織の真只中にいた私の頭の上に敷石が落ちたようなもので数週間に亘り、私の活動を完全に駄目にしてしまった。ドイツ人とスラブ人の友人すべてが私から離れていった。それ迄の私は革命活動に溶け込むことのできた最初のロシア人だった。私はヨーロッパ人がロシアの革命家に言及する際、まずどんな不信や伝統的な感情を示すものか理解して貰うつもりはない。そこで先ずサンド夫人に手紙を書いた。彼女は返事を呉れて、ライン新聞の編集部に宛てた一文のコピーを送って呉れた。彼女は丁寧にだが真剣に否認していた。私はプレスローに行き、ポーランド人の一友人をコロンに送り、もったいぶった完訳を請去した。マルクスは撤回し、過誤をパリ通信員のせいにした。そして彼が不在の時、新聞がその通信文を掲載したのだと言った。彼は自分がそんなことをする筈がない程私をよく知って居ると言い、お世辞と親愛と評価を与えて呉れた。事件はそれでケリだ。その後数ヶ月してベルリンで彼に逢った。

われわれの共通の友人達はお互い氣まぐれだった。それから話のついでに半分冗談めかして半分真剣にマルクスが私に言った。『僕は今共產主義者の秘密結社の長で、みなよく訓練しているから、会員の一人に『バクーニンを殺せ』と言ったら、その男が君を殺すだろうよ。』そこで私は言っちゃった。もし彼の秘密結社が彼の氣に入らぬ人を殺すことしか出来ないのなら、それは下僕とほら吹きが集りじゃないのかね……と。

その後私は一八六四年まで逢っていない。

……私がドイツとロシアの要塞監獄、それにシベリアなどで全く楽しんでいないのに、マルクスとその仲間は英国やドイツの誌紙で酷く不名誉な私に対する中傷を流布させ、書いたり公表したものである。それによれば、私がどこかの監獄に幽閉されたというのは真実じゃない。それどころかニコライ帝は腕を抜けて私を歓待し、必需品のすべて、人生の歡樂のすべてが供応され、貴婦人とジャンペン²を抜いて日を送っていると言うのだ……。

註¹ アーサー・レーニングの註解ではマルクス・エンゲルスは一八四七年「正義の連盟」*League des Justes*に参加したと言う。この連盟はパリに亡命したドイツ共和派の人びとの創始したもので一八四七年ロンドンで共產主義者連盟(秘密結社)に改組された。

註² バクーニンは一八四八年八月廿五日、廿六日ベルリンでマルクスに逢った。一八四九年五月九日十日の夜シェムニッツで逮捕され、一八五〇年一月死刑の宣告を受け同年三月特赦になり、オーストリアへ移され絞首刑から終身刑に変えられ、国外退去を命じられる。次いで一八五一年三月廿三日ペテルスベルグへ移され、一八五一年三月廿三日一八五四年三月一七日迄ピータ・ポール要塞監獄に幽閉される。一八五七年シベリア徒刑。一八六一年日本を経路として米國を通り一八六一年一二月ロンドン入の脱出成功(アーサー・レーニングの註記より)